

Euripides, *Hippolytus* 382–3: “ἡδονὴν ... ἄλλην τιν’” について

堀川宏

序

Euripides の悲劇 *Hippolytus* (以下 *Hipp.*) の 383–430 は Phaedra (以下 Ph.) によるスピーチであるが、その 375–90 は解決の難しい多くの問題を含み、その適切な読み方をめぐって繰り返し議論が戦わされてきた。本稿が扱う 382–3 もそのひとつで、現在もなお見解の一致を見ていない。私見では、これまでになされているいずれの説明も十分に説得的でなく、この箇所を適切に読んでいない。以下、本稿では、まずこれまでに提出された説明を概観しながらそれぞれが孕む問題点を指摘し、その上でそれらの問題点を克服する新しい読み方を提案することにする。

I 議論のまとめと問題点の整理

問題の箇所を含む *Hipp.* 380–3 のギリシャ語原文を以下に掲げる*1。

τὰ χρῆστ' ἐπιστάμεσθα καὶ γινώσκομεν, 380
οὐκ ἐκπονοῦμεν δ', οἱ μὲν ἀργίας ὕπο,
οἱ δ' ἡδονὴν προθέντες ἀντὶ τοῦ καλοῦ
ἄλλην τιν' ...

I.1 「伝統的」解釈とその問題点

382–3 に対する「伝統的」な解釈は次のようなものである。すなわち、“ἄλλην” が「別の」という意味である以上それに対応するひとつめの ἡδονή がなければならぬと考えて、それを 381 の ἀργία に求める。そして“ἀντὶ τοῦ καλοῦ” は直前の “ἡδονὴν προθέντες”

*1 テキストは Diggle による OCT 版に拠る (以下同様)。

との関係で、その比較対象として読む。その結果 382-3 は「ある者は (ἀργία とは) 別の ἡδονήを τὸ καλόνより優先して」という意味になる。

このような解釈は、後に述べる第二の解釈が Barrett によって提出される以前には自明なものとなされ、最近では Craik によって擁護されているが²、語に与えられた強調と意味の力点とを考えると、今日これを支持することは難しい。まず Kovacs の呈する疑問が、素朴ではあるが強力である。すなわち ἀργία が ἡδονήに含まれるのだとしたら、どうして後に挙げられる諸例から区別されているのか³。

この疑問は、μὲν—δέという小辞の対応による ἀργία と ἡδονήとの対比的な提示に注目することによって強められる。このことは、「良いこと」を知っているはずの人間がそれを行わないという事態にふたつの異なる原因があるということを示しており、少なくともそのような言葉づかいがされている。すなわち、ここで ἀργία と ἡδονήのふたつは別々の観念として対比的に提示されているのであり、たとえ ἀργία が ἡδονήに包摂されうる観念だとしても、前者を後者の一種として読むことは難しい⁴。

また、“ἀλλην τω”という表現が行跨ぎ (enjambment) によって行頭に現れていることにも注意が必要である。このことは ἡδονήに付された「別の」という意味に表現上の力点が置かれており、ἡδονήが何かと「別のもの」であると言明することに、何らかの特別な意味があることを示唆している⁵。ここで「ἡδονήが ἀργία と別のものである」ということを示すことに特別な意味はあるだろうか。私はないと判断する。

さらに 382 で “οἱ δ' ἡδονὴν προθέντες” と言われるときの比較対象が、文脈上明らかに τὰ χρηστά (380) であるということにも注意が払われてよいだろう。先に述べたように、「伝統的」な解釈は “ἀντὶ τοῦ καλοῦ” を “ἡδονὴν προθέντες” との関係で、単にその比較対象としてのみ読むが、そのように読むならば “ἀντὶ τοῦ καλοῦ” は完全に冗長な (redundant) 表現ということになり、ここで何ら新しい意味を付け加えない。

² Craik 46.

³ Kovacs 293. 彼は他に、“absence of activity”を意味する ἀργία は ἡδονήの候補にはなりそうもないという反駁理由も挙げている。しかしこれに対しては、(ἀργία と類似の意味を持つ) σχολήを ἡδονήであると認めておきながら、(意味を理由として) ἀργία を ἡδονήから除外することは正当化し難いとする Craik の反論が容れられてよい (Craik 46)。また σχολή (= “leisure”) から区別された ἀργία の意味としては、Solmsen が興味深い指摘をしている。彼は Hesiodus におけるこの語の用いられ方を引き合いに出し、この ἀργία を “unwillingness to do the work which one should do” と説明している (Solmsen 421)。一般的に言えば ἀργία は意味的に ἡδονήに含まれるが、ここではそれとは別のものとして提示されている、というのが妥当な見方だろう。

⁴ cf. Halleran, on 381-3; Willink 14.

⁵ Willink 14. ただしこの力点に関する彼の次の見解には、私は同意しない: “Evidently Phaedra regards ἡδοναί as ‘good’ until proved otherwise, for she is rhetorically concerned to argue that failure to achieve τὸ καλόν may be blameless.”

以上のことから、382-3 を「伝統的」解釈のように読むことは必ずしも自明ではなく、むしろ躊躇いを覚えるべきものであると判断される。

1.2 Barrett の解釈とその問題点

382-3 に対する第二の解釈として Barrett のものがある。彼は 382-3 をいわゆる “Telemachus and the other suitors” 構文と捉え^{*6}、“ἄλλην” を「(前述のものとは) 別のもの、すなわち」という意味にとる^{*7}。その結果 382-3 は「ある者は (ἀργία とは) 別のものである ἡδονήを τὸ καλόνより優先して」となる。彼が “ἡδονὴν ... ἄλλην τῶν” を「(ひとつめの ἡδονήである) ἀργία とは別の ἡδονή」ととらない理由として挙げているのは、「ἀργία は ἡδονήではない」というものである^{*8}。

この説明に対してはまず、「ἀργία は ἡδονήではない」といういかにも恣意的な理由づけを反駁することができるように思われるが^{*9}、より重要なのは “ἄλλην” と “ἡδονήν” との位置関係についての反論である。Willink は “ἄλλην τῶν” がここで “emphatic hyperbaton” の形で表れていることに着目する。彼は Barrett の挙げる例を精査し、それらにおいて ἄλλος が特別な強調を受けずに、かつ被修飾語に先行して現れていることを指摘して、問題の ἄλλος が「(前述のものとは) 別のもの、すなわち」という意味になることはない結論づけている^{*10}。これに加えて Claus は、Barrett の言うような「付け加え」の ἄλλος は前出のものに対して同類の項を加える場合に付随的に用いられるのであり、それと対立する性質の項を導入するものではないと述べ、Barrett の説明に異議を唱えている^{*11}。これらの反論はともに、Barrett の挙げる ἄλλος の用法のだいたいにおいて適切な観察に基づいており、一見とても説得的である^{*12}。

しかし、考察の範囲を Barrett の挙げる例からさらに広げるなら、彼らの反論は必ずしも妥当ではない。まず Willink の指摘する被修飾語に対する ἄλλος の先行性であるが、これには E. Or. 533; S. OT 7; Hom. Od. 13.167, 434; 14.342; 19.601 を反証として挙げるこ

^{*6} この表現は Kovacs 293 に拠る。

^{*7} cf. LSJ II.8; Manuwald 137 もまた問題の ἄλλος をこのように解している。

^{*8} Barrett, on 381-5. なお Craik は Barrett の解釈を “Having preferred, instead of the good, something else, namely some pleasure” とパラフレーズしているが (Craik 46)、ここで “instead of the good” というのは “instead of ἀργία” の誤りであろう。

^{*9} 上記注 3 を参照。

^{*10} Willink 14.

^{*11} Claus 228. この指摘に際して Claus が想定しているのは、例えば次のような例である: “μήτηρ ἦδὲ πατὴρ ἦδ’ ἄλλοι πάντες ἐταῖροι” (Od. 9.367).

^{*12} cf. Halleran, on 381-3; Kovacs 293. Craik もまた、Barrett への反論を Claus に依拠して行っている (Craik 46)。

ができる。さらにこの中で OT 7 には行跨ぎによる ἄλλος の強調が見られ、そしてこの強調された ἄλλος は比較対象である αὐτός との間に明確なコントラストを形成している^{*13}。これらの例は、問題の ἄλλος を「(前述のものとは) 別のもの、すなわち」という意味に取れないとする Willink や Claus の説明を退けるのに充分である。少なくとも ἄλλος の意味に関しては、それを Barrett のように捉えることを、このような説明によって否定すべきではない。

Barrett の説明が犯している決定的な過ちは、私の判断では、Willink や Claus が攻撃したような ἄλλος の意味の面ではなく、それを「伝統的」解釈と同様に ἀργία との関係で読んでいるという、比較対象の設定の仕方にこそある。“ἄλλην τιν’” を ἀργία との関係で読んだ場合に、ここで行跨ぎによって「別の」に置かれた意味上の力点を説明することができない、ということについてはすでに述べた。またこのように読むことは、必然的に “ἀντὶ τοῦ καλοῦ” を “ἡδονὴν προθέεντες” との関係で読むことを意味するが、このように読む限り、Barrett も「伝統的」解釈と同様ひどく冗長な表現を許容していることになる。

これらふたつの問題点のうち “ἀντὶ τοῦ καλοῦ” の冗長さについては、次に述べる第三の解釈によって、少なくともその構文的な理解に関しては適切に、回避されることになる。それを提唱したのは Kovacs である。

1.3 Kovacs の解釈とその問題点

Kovacs は ἄλλος ἀντί という表現を ἄλλος ἢ の “an idiomatic variation” と捉え、問題の “ἀντὶ τοῦ καλοῦ” を “ἄλλην τιν’” に関係させて、その全体を “τὸ καλὸν とは別の ἡδονήを” と理解するべきだと主張した^{*14}。それにより “ἡδονὴν ... προθέεντες” は明示的な比較対象を欠くことになるが、すでに述べたように、文脈から τὰ χρηστά を補うことは難しくないばかりか自然でさえある。彼はまた “ἄλλην τιν’” が被修飾語 “ἡδονήν” から離れているという事実が “ἀντὶ τοῦ καλοῦ” を括弧にくくり、“ἄλλην τιν’” との結びつきを強化すると述べ

^{*13} cf. OT 6-7: “ἀγὼ δικαιοῦν μὴ παρ’ ἀγγέλων, τέκνα, | ἄλλων ἀκούειν αὐτὸς ὡδ’ ἐλήλυθα.” これは Barrett の挙げる LSJ II.8 に、“redundant” な用法として挙げられているものである。この例において付加された “ἄλλων” が、“ἀγγέλων” と “αὐτός” とのコントラストの形成を実現しているということについては、この個所に対する Jebb および Dawe の注を参照せよ。また同様のコントラストを指摘するものとして、II. 2.191 に対する Kirk の注も参照せよ。

^{*14} Kovacs 293-4. 彼以前にすでに Willink と Claus が同様の主張をしていたが、彼らの主張に文法的な根拠を与えた点で Kovacs は特筆に値する。彼が指示する参照例は以下のものである：E. Hel. 450: “οἶκον πρὸς ἄλλον νῦν τιν’ ἀντὶ τοῦδ’ ἴθι.”; Rh. 204: “ἐπεὶ τίν’ ἄλλην ἀντὶ τῆσδ’ ἐξείς στολήν.”; A. Pr. 467-8: “θαλασσόπλαγκτα δ’ οὔτις ἄλλος ἀντ’ ἐμοῦ | λινόπτερ’ ἠῦρε ναυτίλων ὀχήματα.”; S. Aj. 444: “οὐκ ἄν τις αὐτ’ ἔμαρψεν ἄλλος ἀντ’ ἐμοῦ.” また同様の例は他にも多数ある：E. Hel. 574; HF 519; Andr. 907; IA 86; A. A. 1268; S. El. 582; Fr. (Radt 314 [i.e. Ich.]) 333-4; OC 488; Tr. 1225-6; Ar. Nu. 653; Arist. EE 1244b, etc.

ているが^{*15}、“οἱ δ’ ἡδονὴν προθέεντες” までの時点で比較対象が明らかであるということを考えるなら、この説明も説得的であるように思われる^{*16}。これが第三の解釈であるが、それによると 382-3 の意味は「ある者は τὸ καλόν とは別の ἡδονή を (τὰ χρηστά よりも) 優先して」となる。このとき τὸ καλόν は、“ἄλλην τιν’” の要求する「ひとつめの ἡδονή」として捉えられている。

このように主張する Kovacs の説明は、その構文的理解に限って言えば、多くの賛同を得ている^{*17}。しかしこの解釈に基づいて彼が展開する τὸ καλόν の意味についての説明に対しては、批判的に検討を加えるべきであるように思われる。382-3 を Kovacs の言うような意味にとるためには、この詩行を耳にした観客が、τὸ καλόν が ἡδονή でありうるということだけをただちに了解できたと想定しなければならない^{*18}。彼は Democritus 68 B 207 (DK) に τὸ καλόν に基づく ἡδονή の存在が示唆されていることと^{*19}、Arist. *EN* において「有徳の者は徳高い行為のなかに最も大きな喜びを見出す」という考えが窺われるという事実を根拠にして^{*20}、「τὸ καλόν がそれ自体として喜び (ἡδονή) であるということ、本劇の観客は逆説と感ずることなく理解しえた」と主張する^{*21}。そして 382 の τὸ καλόν を、良い評判をもたらす立派な “virtuous action” という意味で理解し、それが Ph. のような人間にとっては ἡδονή であると説明している^{*22}。

これに対しては Craik が有効な反論を行っている。彼女は正しい行いが時に喜びでありうるという Kovacs の主張を「文脈を抜きにすれば」という条件つきで認めつつ、382-3

^{*15} Kovacs 293-4. また Willink 14 も参照。

^{*16} これについては Craik による反論がある (Craik 46)。彼女は “good’ ἀντί ‘bad’” という対立関係が一般的に見られるという事実を Kovacs が無視しているとするのであるが、しかしこの反論はあまり説得的ではない。なぜなら彼は “ἀντί τοῦ καλοῦ ἄλλην τιν’” という表現の全体が “ἡδονήν” を説明すると捉えているのであって、そのとき τὸ καλόν (i.e. “good”) と ἄλλη τις (= ἡδονή, i.e. “bad”) との間には Craik が言うのと同様の対立関係が内包されているからである。重要なのは “good’ ἀντί ‘bad’” という対立関係が一般的であるということを理由にして、“ἀντί τοῦ καλοῦ” を “ἄλλην τιν’” に関係させるべきでない²と主張できるかどうかであろうが、残念ながら Craik はこのように議論を展開してはいない。

^{*17} e.g. Cairns 323-4, n. 218; Halleran, on 381-3. “ἀντί τοῦ καλοῦ” を “ἄλλην τιν’” と関係させて読むという点については、私も Kovacs に賛同する。

^{*18} Sommerstein は、Kovacs の主張が成り立つためには「τὸ καλόν が常に ἡδονή である」ということが前提されなければならないとしている (Sommerstein 27, n. 16)。しかし、Kovacs の主張に必要なのは「τὸ καλόν が ἡδονή でありうる」ということであり、したがって「Democritus 断片が 382-3 と関係があるかどうかははっきりしない」という Sommerstein の反論は成り立たない。

^{*19} 具体的には以下の文：“ἡδονὴν οὐ πάσαν, ἀλλὰ τὴν ἐπὶ τῷ καλῷ αἰρείσθαι χρεών.”

^{*20} cf. *EN* 1099a7-21; 1104b3-1105a16.

^{*21} Kovacs 294.

^{*22} Kovacs 294, 297. Cairns 323-4, n. 218 や Mills 57 もまた、τὸ καλόν を Ph. にとつての一種の ἡδονή であると説明している。

の置かれた文脈においては Ph. の関心が “relative pleasures” にではなく、τὰ χρηστά や τὸ καλόν と対立する “absolute” な悦びにあることは明らかだとしている²³。すなわち、Ph. がここで問題にしているのは端的に τὰ χρηστά や τὸ καλόν と対立する ἡδονή であり、ἡδονή の一種としての τὸ καλόν との比較を前提とする ἡδονή ではない。私はこの見方を支持する。

また Sommerstein による反論も有効であろう。彼が異を唱えているのは、ここで「τὸ καλόν が ἡδονή である」ということを観衆が「逆説と感ずることなく」理解しえたとする見解である。彼によれば、Kovacs が傍証として挙げる哲学的議論において「τὸ καλόν が ἡδονή である」ということがあえて主張されているという事実が肝心なのであって、この主張を述べるまでもなく明らかなものとして前提にした議論は存在しない²⁴。この点については、“(sensual) pleasure” と “(rational) virtue” とを対置して捉える見方が古典期のギリシャにおいて一般的に見られるという Craik の指摘が考え合わされるべきであろう²⁵。すなわち Kovacs の主張が前提として必要とする、この詩行を耳にした観客が τὸ καλόν が ἡδονή でありうるということだけをただちに了解できたという想定は、彼の挙げる諸例を参照したとしても疑わしい。

以上で確認したことは、382-3 の理解に際して構文的には Kovacs の説明を受け容れるべきである一方で、その説明が前提としている τὸ καλόν = ἡδονή という見方は受け容れがたいということである。382 の τὸ καλόν は「名誉ある行為」という限定的な意味は持たず、380 の τὰ χρηστά を言い換えた一般的な価値評価の言葉として捉えられるべきである。ここで、“ἀντὶ τοῦ καλοῦ ἄλλη τι” という意味のまとまりが “ἡδονή” を修飾しているという構文的な理解を保持しつつ、τὸ καλόν を ἡδονή と見なさずに、むしろそれと対立する意味を持つものとして捉えることは可能だろうか、という問いが立てられることになる。

²³ Craik 46 (また Claus 226 における Barrett の読み方のまとめと、Cairns 323-4, n. 218 も参照せよ)。ただしこのように言う Craik の目的は、“ἀντὶ τοῦ καλοῦ ἄλλη τι” をひとまとまりの表現として読む提案を退けることである。私は、上述のように、これをひとまとまりの表現として読む。ここで Craik による反論を援用するのは、あくまでも τὸ καλόν の意味に関してである。

²⁴ Sommerstein 29.

²⁵ Craik 51-2. 彼女の挙げる例の他に、Pl. *Phib.* 11b-12b も注目に値する。これは ἡδονή と τὸ φρονεῖν とが別々のものであるという認識を前提にしており (esp. “τῆς γε ἡδονῆς ἀμείνω”), *Phib.* における以下の議論はこの対立を前提として進んで行く。

2 新たな観点からの考察（解釈の前提への疑問を手がかりに）

この問いを問うに際して、これまで自明視されてきたある前提を疑ってみることが必要であろう。以上で確認したこれまでの解釈はすべて、“ἄλλην”が要求する「ひとつめのἡδονή」との比較によって382のἡδονήを理解しようとしてきた。言い換えれば、“ἄλλος A”という表現において ἄλλος の被修飾語である A が、その比較対象である B と厳密に同じカテゴリーに属さなければならないということを、考察の揺るがない出発点として認めてきた。

しかし、すでに Barrett の挙げる各例に見られるように、ギリシャ語において“ἄλλος A”という表現は「(B とは) 別のものである A」という「同格的 (appositional)」な関係をあらわすことがあり、このとき A と B とは必ずしも同一カテゴリーに属さない^{*26}。問題の箇所において“ἄλλην τιν’”をこのような意味にとることに對する Willink や Claus の反論が成功していないことはすでに見たが、そうである以上この表現を、A と同一カテゴリーに属さない B との比較をあらわすものとして、より具体的には「ひとつめのἡδονή」を前提としない表現として、理解する試みが積極的になされて良いはずである。

そのような試みに際して、ひとつ確認しておかなければならないことがある。それは「(B とは) 別のものである A」という「同格的」な関係をあらわす ἄλλος と、それによって修飾される語 A との文法的な関係である。両者はしばしば、意味のレベルだけでなく統語のレベルにおいても、修飾／被修飾の関係ではなく、同格関係にあるかのように説明される。例えば *Od.* 1.132 に対する Merry & Riddell の説明は、“ἄλλων”と意味的に同格関係にある“μνηστήρων”が後ろから“ἄλλων”の内容を説明している、というものである^{*27}。彼らはここで“epexegetic use of a noun after ἄλλος”という表現を用いているが、このことは“ἄλλων”と“μνηστήρων”が統語的にも同格関係にあるという原文理解を反映しているように思われる（あるいは少なくとも、そのような誤解を招きかねない説明の仕方をしてい

^{*26} cf. *A. Ch.* 365; *Pers.* 766; *S. OC* 954; *OT* 7, 789; *E. Ion* 162; *Med.* 296, 444, 750.

^{*27} 彼らの説明は以下の通り：“This epexegetic use of a noun after ἄλλος is not uncommon in Homer. Cp. *Od.* 5.105 ἄλλων ... τῶν ἀνδρῶν, 10. 485 ἄλλων ... ἐτάρων. The process seems reversed in such a phrase as ἅμα τῆ γε καὶ ἀμφίπολοι κίον ἄλλαι *Od.* 6.84; cp. *Soph. Aj.* 516 ἄλλη μοῖρα, *Phil.* 38 ἄλλα ῥάκη. *Livy* 4.41 *plaustra iumentaque alia*. Ameis quotes as parallels *Od.* 2.412; 8.368; 15.407, 449; 18.416; 19.601; 20.324; *Il.* 2.191; 13.622.” なお *Od.* 1.132–4 のギリシャ語原文は以下の通り：“πὰρ δ’ αὐτὸς κλισμὸν θέτο ποικίλον, ἔκτοθεν ἄλλων | μνηστήρων, μὴ ξείνος ἀνηθείς ὀρυμαγδῶι | δειπνῶι ἀδήσειεν, ὑπερφιάλοισι μετελθῶν, | ἦδ’ ἵνα μιν περὶ πατρὸς ἀποχομένοιο ἔροιτο.”

る)^{*28}。

しかし、“οἱ ἄλλοι Ἀθηναῖοι” (T. 7.70) など散文の例が強く示唆しているのは、類似の例において、ἄλλοςが統語的には属性的 (attributive) に機能していながら意味的には同格関係にあると理解せざるをえない、という事実である^{*29}。つまり、ギリシャ語においては「同格的」な関係をあらわす ἄλλοςとそうではない「通常」の ἄλλοςとの間に表現上の差異は存在しないのであり、「(Bとは) 別のものであるA」という意味関係も「(Bとは) 別のA」も、ともに ἄλλοςを修飾語としてAを被修飾語とする“ἄλλοςA”という形で表現される。したがって、後者の意味で用いられる ἄλλοςが場合によっては倒置による強調を受けるのであれば、前者の意味を持つそれも、同様の強調を受けることがあって然るべきであろう。以上のことから、問題の箇所における ἄλλοςをその被修飾語から引きはがして提示すること自体に、Willink や Claus らが指摘したような問題はないと判断される。

このように、問題の表現を「ひとつめの ἡδονή」を前提とせず読むことは文法的に充分可能であるが、このように読むとき、ἡδονήとその比較対象である τὸ καλόνとの関係はほとんど疑いの余地がないほどに明らかである。まず、ἡδονήがここで τὰ χρηστά (380) の実現を妨げ διαφθορά βίου (376) をもたらす要因として挙げられているのに対して、τὸ καλόνの方は“κακίον” (378) の裏側に想定されている καλάや380の τὰ χρηστάとともに、ἀργία (381) や ἡδονήによって損なわれてしまうもの、すなわち διαφθορά βίουを避けるためにはそちらの方をこそ選ばなければならないものとして現れている^{*30}。言うまでもなく両者は対立関係にあり、その関係は前置詞 ἀντίによって明瞭にあらわされている。

また、“ἄλλην τι”が行跨ぎを起こす位置に倒置されることによって生じる強調についても、このように考えることによって説明することができる。このとき、それを選んでしまうことによって διαφθορά βίουに陥ると言われている ἡδονήに対して、“ἀντί τοῦ καλοῦ ἄλλην τι”によってあらわされる「τὸ καλόνとは別のものである」という情報が、極めて重要な情報として強調を受ける形で、付加されることになる。ここで周囲の文脈に目を転じると、この表現は375から続く一連の考察の一部である。375-81で言われていることの裏には、明らかに、τὸ καλόνをするのであれば διαφθορά βίουに陥らずに済むと知りながら、それに対立する ἀργίαや ἡδονήを選んでしまうことによって破滅を避けることができなくなる、という認識が窺われる。この認識において決定的に重要なのは、

^{*28} 同箇所に対する S. West の説明や、Od. 13.432 に対する Stanford の説明、また Med. 296, 444, 750 に対する Mastronarde の説明も同様である。

^{*29} cf. Smyth 1272. 同様の例は、例えば Pl. Phd. 110c; Chrm. 166e; Phdr. 232e; Grg. 437c; X. An. 1.5.5; Cyr. 1.6.2 などに見られる。

^{*30} τὸ καλόνをこのような καλάや τὰ χρηστάと本質的に同じものを意味すると読むことについて、私は Craik に同意する (上記注 23 参照)。

ἡδονήが τὸ καλόν に対立するという、まさにその事実であろう。この事実を改めてはっきりと提示することにこそ、“ἄλλην τιῶν” の倒置の眼目はあるのではないか^{*31}。

3 結び

Hipp. 382–3 の “ἡδονὴν ... ἄλλην τιῶν” という表現に対する本稿の考察は以上である。そのエッセンスを改めて示すと次のようになる。すなわち、“ἀντὶ τοῦ καλοῦ” を “ἄλλην τιῶν” に関係させて読む Kovacs らの構文理解を保持しながら、これまでの説明が当然の前提としてきた「ひとつめの ἡδονή」の想定を是とせず、“ἡδονὴν ... ἀντὶ τοῦ καλοῦ ἄλλην τιῶν” を「τὸ καλόν とは別のものである ἡδονήを」と理解することによって “ἄλλην τιῶν” に置かれた強調を説明しようとした。強調の眼目は、τὸ καλόν に対立するという ἡδονή の性質を明示することにある。

ここで ἡδονή は、それを選んだ者に διαφθορὰ βίου をもたらすものとして言及されている。これは当然、発言者である Ph. にも当てはまることであるが、彼女はしかし 391 以降で、自分はそのような ἡδονή を選ばずにむしろ τὸ καλόν の方を選ぶ（だから賞讃されこそすれ非難されるには値しない）と言葉を継いでゆく^{*32}。すなわち、ごく単純に言えば、373–430 のスピーチ全体が、382–3 で非常に強い形で示された ἡδονή と τὸ καλόν との対立を軸に展開してゆくことになるのであるが、このことについての議論は別稿に譲ることにする。

参考文献

Barrett, W. S., *Euripides: Hippolytos* (Oxford, 1964)

Cairns, D., *Aidos: The Psychology and Ethics of Honour and Shame in Ancient Greek Literature* (Oxford, 1993)

Claus, D., “Phaedra and the Socratic Paradox,” *YCS* 22 (1972) 223–38

^{*31} このような ἡδονή と τὸ καλόν との対立的提示は、本稿が試みた「属性的形容詞の倒置による」という説明の他に、“ἀντὶ τοῦ καλοῦ ἄλλην τιῶν” を “ἡδονήν” に対する述語 (predicate) と捉えることによっても説明することができるだろう。このとき “ἄλλην τιῶν” は、「τὸ καλόν と対立する別の何か」を意味する ἄλλο τι が “ἡδονή” の性に牽引された結果である。問題の箇所がどのような経緯でこのような表現を得たのか判断は難しいが、いずれの説明に拠るにしても、ἡδονή と τὸ καλόν との対立的な提示に表現上の意味があることは確かであるように思われる。

^{*32} このスピーチ全体の読みの大枠については、特に Kovacs 291–2 と Cairns 322–3 を参照。

- Craik, E. M., "ΑΙΔΩΣ in Euripides' *Hippolytos* 373-430: Review and Reinterpretation," *JHS* 113 (1993) 45-59
- Dawe, R. D., *Sophocles: Oedipus Rex*, Revised Edition (Cambridge, 2006)
- Diggle, J., *Euripidis Fabulae*, vol. 1 (Oxford, 1984)
- Halleran, M. R., *Euripides: Hippolytus* (Warminster, 1995)
- Heubeck, A., West, S., and Hainsworth, J. B., *A Commentary on Homer's Odyssey*, vol. 1: *Introduction and Books 1-8* (Cambridge, 1988)
- Jebb, R. C., *The Plays of Sophocles: Oedipus Tyrannus* (Cambridge, 1883)
- Kirk, G. S., *The Iliad: A Commentary*, vol. 1: *Books 1-4* (Cambridge, 1985)
- Kovacs, D., "Shame, Pleasure, and Honor in Phaedra's Great Speech (Euripides, *Hippolytus* 375-87)," *AJP* 101 (1980) 287-303
- Manuwald, B., "Phaidras tragischer Irrtum: zur Rede Phaidras in Euripides' *Hippolytos* (vv. 373-430)," *RhM* 122 (1979) 134-48
- Mastronarde, D. J., *Euripides: Medea* (Cambridge, 2002)
- Merry, W. W., and Riddell, J., *Homer's Odyssey*, vol. 1: *Books 1-12* (Oxford, 1886)
- Mills, S., *Euripides: Hippolytus* (London, 2002)
- Solmsen, F., "'Bad Shame' and Related Problems in Phaedra's Speech (Euripides *Hippolytus* 380-388)," *Hermes* 101 (1973) 420-5
- Sommerstein, A. H., "Notes on Euripides' *Hippolytus*," *BICS* 35 (1988) 23-41
- Stanford, W. B., *The Odyssey of Homer*, vol. 1: *Books 1-12* (London, 1947)
- Willink, C. W., "Some Problems of Text and Interpretation in *Hippolytus*," *CQ* 18 (1968) 11-43

(京都大学大学院生)